

# アソシエ21 ニューズレター

報告◎反人種主義・差別撤廃世界会議  
問われる反覇権共同戦線の構築 武者小路公秀さんに聞く◎石井崇志●2

報告◎国際シンポジウム「東アジアの二一世紀——共通の理解をめざして」  
多様性と相互尊重による文化連帯の創造を◎伊藤成彦●5

報告◎シンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動」  
消し去ることのできない歴史の記憶◎加藤哲郎●8

論説◎  
「戦闘行為」と「作戦計画」◎斉藤一雄●11

中国だより◎  
魂に触れる革命◎中野英夫●13

会員の刊書●10, 12

事務局会議ほか活動の報告●15

12<sup>2001年</sup>  
月号

ASSOCIATE 21

# 消し去ることのできない歴史の記憶

加藤哲郎

一月一七日、東京新宿駅前で、米国同時テロ事件以後の沖繩経済の深刻な落ち込みに対して「だいじょうぶさあ、沖繩」観光キャンペーンが行われている頃、近くの専修大学で、一つのシンボジウムが開かれた。「占領下、沖繩・奄美の非合法抵抗運動について」と題し、私の講演など七本の報告に、朝早くから夕方まで、約一〇〇人が熱心に耳を傾けた。

そもそもこのきっかけは、五月二〇日付本紙「琉球新報」でややセンセーショナルに報じられた、私の論文「新たに発見された『沖繩・奄美非合法共産党文書』について」だった。戦後の日本共産党で長く沖繩問題を担当していた故高安重正氏の所蔵文書が、福島県の金沢幸雄氏宅に眠っていたのを発掘し、法政大学「大原社会問題研究所雑誌」に約七〇点の資料目録付きで解説・発表した（二〇〇一年四・五月号）。国場幸太郎氏らの協力を得たものだった。それが予想外の反響を呼んで、私の研究に資料を提供し共同研究を進めてきた七人が、由井格氏らの実行委員会に招かれ、それぞれ史実と資料を踏まえた研究・証言を発表した。

私自身は、資料紹介を兼ねて、戦後日本共産党書記長徳田球一らの沖繩独立論から日本復帰論への転換が、最近公表さ

れたスターリンの「アジア・コミンフォルム（共産党労働者党情報局）構想を含む米ソ冷戦・朝鮮戦争と密接に連動し、共産党の朝鮮半島統一・在日朝鮮人運動を主眼とした「民族」政策の変化に照応していることを「戦後社会運動における想像の共同体」として示し、奄美共産党が日本復帰方針を確立した時期、瀬長亀次郎人民党書記長が非合法党に加わる経緯など、なお解明すべき問題が多いことを述べた。

沖繩非合法共産党資料の提供者金沢幸雄氏からは高安文書が金沢氏に渡った経緯と背景、奄美関係資料提供者松田清氏から奄美の活動家が沖繩に先行して共産党をつくった歴史の報告があり、若手研究者の森宣雄氏は、奄美共産党指導者であった林義巳氏からの聞き取り調査・資料をもとに、林氏が沖繩に渡って奄美共産党沖繩細胞をつくり五二年日本道路争議を勝利させ、それを契機に当初ためらっていた瀬長氏が非合法党に加わった事情、その過程で林氏が構想した奄美と沖繩の対等・平等な民衆連帯と共感の意義を述べた。

島山淳氏は、五〇年代の反共主義とその破綻を、米軍のプロバガンダばかりでなく、米国の援助に頼って経済復興をはかった初代琉球政府任命主席比嘉秀平らの「復興主義」にも

内在するとし、伊江島・伊佐浜の土地闘争から「島ぐるみ闘争」へと展開する文脈で地下共産党を理解すべきと論じた。若くして非合法党に加わった大峰林一氏は、非合法共産党の存在が沖縄人民党史からも日本共産党史からも長く秘匿されてきた問題を提起し、瀬長氏を助ける指導部の一員であった国場幸太郎氏は、自らCICに逮捕され拷問を受けた体験をまじえながら、瀬長氏が軍政下の合法政党として人民党を結成した意図と経緯、米軍弾圧で人民党さえ非合法化されかねない条件のもとで地下組織である共産党の結成に踏み切ったこと、しかし沖縄の党は本土共産党の軍事方針をうのみにせず黙殺し、自主的・大衆的に民衆に依拠した島ぐるみの統一戦線を組織できたことを、詳しく証言した。

会場には、新崎盛暉沖縄大学長、平井一臣鹿児島大教授ら研究者のほかに、沖縄民主同盟で活動した上原信夫氏、本土の共産党で「五〇年問題」を体験した増山太助・いいたもも氏らの顔も見えた。シンポジウム後の懇親会で新崎教授が述べたように、新崎氏らが関係者の聞き取りから考え推測してきた筋道が第一次資料で裏付けをえたこと、森・鳥山氏ら若い研究者が沖縄・奄美現代史の一齣としてタブーも偏見もない学術研究の対象にしたことが、大きな成果であった。私自身はその糸口をつくったことに満足しているが、解説できた資料は、なお一部である。国場氏や新世代の研究者と共に、さらに情報収集・解説を進め、沖縄をはじめ世界の研究者に公開して、歴史の共有財産にしていきたい。

しかし気がかりなこともある。新資料の最も重要な当事者

瀬長亀次郎氏は、証言を残さぬまま永眠された。五五年非合法党文書が祖国復帰統一戦線の一翼として高く評価していた西銘順治氏も世を去った。沖縄戦・初期軍政を詳しく記録してきた現代史研究は、そろそろ本格的に五〇年代を対象とすべきではないか？ かつての沖縄人民党関係者は、地下の非合法党については、なお沈黙を守っているという。

しかしまもなく半世紀、南ベトナム解放民族戦線をベトナム労働党が指導していたことは、今では世界史辞典にも出ている。瀬長氏を那覇市長に押しあげた人民党の背後に共産党があったとしても、歴史的評価が変わるはずもない。むしろ瀬長氏の足跡に、誇るべき一頁を加えることになるのではないか？

歴史の記憶は、消し去ることはできない。文書の記録と証言があれば、なおさらのことである。米国同時テロに始まる米軍基地の臨戦態勢と不況の直撃に、朝鮮戦争から「島ぐるみ闘争」にいたる時代は、貴重な何かを教えてくれるのではないだろうか。

(注) この文章は、もともと「琉球新報」文化部からシンポジウム開催以前に依頼され、指定字数通りにシンポジウムの翌日に書かれたが、締切前の送稿後、同紙文化部は、写真を入れるためのスペースの都合で冒頭・末尾の数行を削除したいと、筆者の公務中に電話で伝えてきて、ゲラ刷りも見ることができないまま、やむなく了承した。依頼してきた記者でもなかったので、ちよつと不審に思った。

その危惧は、的中した。一月二三日「琉球新報」文化欄に筆者の名前で掲載されたものは、冒頭・末尾の現代的意義を述べた文章の削除ばかりではなかった。主タイトルが「奄美共産党が主導」となっていて、奄美共産党創立が先行しつつも沖縄人民党瀬長亀次郎氏が自主的・自発的に非法法党形成に踏み切ったという松田・森報告の私の要約の主旨を誤って伝えており、中間の「国場氏や新世代の研究者と共に、さらに情報収集・解読を進め、沖縄をはじめ世界の研究者に公開して、歴史の共有財産にしていきたい」という一節が、無断で削除されていた。あまつさえ、右の「五五年非法法党文書が祖国復帰統一戦線の一翼として高く評価していた西銘順治氏も世を去った」という文章を、著者にいつさい断ることなく、「五五年非法法党文書を、祖国復帰統一戦線の一翼として高く評価していた西銘順治氏も世を去った」と勝手に主語・述語を転倒させるといふ、重大な誤りを含んだかたちで発表された。

この最後の問題については、故西銘順治氏関係者にも迷惑をかけることになるので、筆者から強く抗議・訂正を申し入れ、一月一日付け同紙文化欄で短い訂正がなされたが、掲載の仕方全体が筆者の本旨にかなうものではなかったのので、筆者のホームページ「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」<http://www.fujitsu.or.jp/~katoel/home.html>に訂正版のスクリーン写真を掲げたうえで、ここに、オリジナル版を公表するものである。

(一橋大学教授)

## 会員の 新刊書

野添憲治 編

### 秋田 柚子造材之図

A5変形判、八九頁(グラビア二七頁)、一五〇〇円+税、一〇月発行、能代文化出版社(〒016-0864 秋田県能代市鳥小屋五九―一二、電話〇一八五―五二七五五〇)昔から米代川流域(秋田県)は天然秋田杉の宝庫だったが、それがどのように伐採され、製品にされ、海に運ばれたのか、よくわかっていない。米代川中流の旧家に暮末か明治初期の作とみられる画帳「秋田 柚子造材之図」が保存され、古い時代の作業の様子や製品、道具などが鮮明に描かれていた。その一枚一枚に編者が「体験的解説」を加えた。(帯の惹句より)

内田雅敏 著

### 懲戒除名 非行弁護士を撃て

四六判、三一八頁、一六〇〇円+税、九月発行、太田出版(〒160-8571 東京都新宿区荒木町二二エプロットビルF、電話〇三―三三三九―六二六二)「会社にタカる総会屋のように、社会に巣食うダニがいる。これは、資格をもった総会屋」であり、弁護士バッジをつけたダニである悪徳弁護士との、わが友・内田雅敏の巧まざるユ―モアに満ちた奮闘記である」(佐高信氏評)